

## ○解剖学第Ⅱ講座○

### 沿革

解剖学第Ⅱ講座のルーツは、大正5（1916）年4月11日認可の東洋歯科医学校（修業年限2年）の設置に遡る。その認可書類には、学科課程として系統解剖学、歯科解剖学、組織及胎生学総論、歯科組織及胎生学が定められている。これらはまさに今、本学部の解剖学第Ⅰ及び第Ⅱ講座が担当している授業内容であり、本邦の歯科医師養成を担う基礎医歯学教育の系譜が今日に至るまで綿々と続いている証だといえる。これらの学科目の担当者としては、森田齊次、中島左一、横地秀雄、大橋正輔の名が確認できる。東洋歯科医学専門学校（修業年限4年）の認可書類（大正9年4月1日）においても、ほぼ同様な名称の学科目がみられ、これらが第1学年の前後期に配置され、系統解剖実習と組織学実習の一部は第2学年前期にまで及んでいたことがわかる。東洋歯科医学専門学校は、その後、日本大学と合併し、大正11年に日本大学専門部歯科が誕生し、大正15年に夜間の日本大学歯科医学校が設置された。

日本解剖学会100周年記念『教室史』（平成7（1995）年刊）では、専門部歯科での解剖学・組織学講義の担当者として、前出の森田らに加え、二村領次郎、林禮、伊澤好爲、堀泰二らの名がみられる。現在の講座とは性格を異にするが、解剖学研究室が昭和7（1932）年に開設され、昭和10年に初めて専任として香山明が講師を委嘱され、解剖学実習及び標本作製を担当したとも記されている。香山は、京都帝国大学医学部解剖学教室で足立文太郎、鈴木文太郎、加門桂太郎の3人の教授の指導を受けて肉眼解剖学を学び、標本作製に卓越した技術を持っていたようである。

昭和14（1939）年4月に慶應義塾大学教授の望月周三郎及び谷口虎年、同助教授の伊東俊夫がそれぞれ、解剖学、胎生学、解剖・組織学の担任講師を委嘱された。伊東は同年6月に教授に任せられたが実質的には兼任であった。昭和12年、助手となった望月芳郎（専門部歯科9回卒）は、昭和14年に助教授、翌15年に附属病院レントゲン部勤

務、昭和16年に教授を拝命したが、解剖学研究室を主催することなく昭和22年に退職している（『日本大学歯学部六十年史』、昭和54年刊）。昭和16年3月に伊東俊夫が東京女子医学専門学校の教授就任のため本学教授を辞し、同年4月加藤信一が教授に任せられ、解剖学・組織学の担当を命ぜられたが、加藤も伊東と同様に実質的に兼任教授であった。すなわち、戦前の解剖学研究室は、専任教員を主体とする今日的な講座としては確立しておらず、授業担当者個々が教育を担っていた。

昭和22（1947）年6月18日、日本大学歯学部の設置認可が下りると同時に、加藤信一が解剖学担当の教授を命ぜられ、ここに初めて解剖学教室における専任教員が誕生した。『教室開設20年の記録』（昭和43年刊、日本大学歯学部解剖学教室）の記載では、昭和22年6月をもって教室開設としている。翌23年3月には三井但夫が専任教員となり、解剖学教室は2人の専任教員によって運営されるに至った。なお、制度としての講座の開設は昭和24年とされる。加藤、三井両教授は日本大学歯学部解剖学教室の創設者として永くその名を刻むといえよう。三井は昭和34年9月に慶應義塾大学に移り、昭和43年4月に尾崎公、磯川宗七の2人の教授が誕生し教授は3名となった。後二者は日本大学歯学部としての第1回卒業生であった。その後、加藤と尾崎は昭和46年4月開設の日本大学松戸歯科大学へ移籍し、代わって同年7月に北川正が日本大学医学部解剖学教室から歯学部勤務を命ぜられ、赴任後直ちに教授を拝任し、第1講座を主宰した。

昭和43（1968）年4月に教授を拝任した磯川は、本学部卒業後、病理学教室に籍を置いていたが、昭和30年4月から東京大学医学部解剖学教室に内地留学し、昭和32年5月には東京大学医学部助手（文部教官）となって藤田恒太郎教授の下で教育・研究に従事し学位を授与され、帰学後、本学部解剖学教室に移り、昭和34年に本学講師、昭和36年7月に米国インディアナ大学歯学部のVan Huysen博士の下に留学した。昭和38年に帰

朝後、直ちに助教授となった。昭和43年の教授就任後7年間、歯学部解剖学教室第2講座を主宰して口腔組織学の分野での研究室づくりに専念し、数多くの業績と多くの門下生を養成したが、昭和50年1月病没した。この間の教室における研究設備の充実はめざましいものがあり、これから研究成績が待ち望まれていた矢先のことであったため、その死は惜しみて余りある。磯川の逝去により解剖学教室の教授は北川のみとなつたが、昭和52年4月に第2講座の助教授であった戸田善久が教授を兼任し、平成16（2004）年9月まで第2講座を主宰した。

昭和52（1977）年4月に教授を兼任し解剖学教室第2講座を主催した戸田善久（図1）は、本学部卒業後間もない昭和38年10月に渡米している。インディアナ大学歯学部の口腔組織学教室での2年間の留学生活からの帰国後、昭和40年12月に日本大学助手、昭和43年4月に日本大学専任講師に昇任し組織学を担当した。また、昭和47年4月からは日本大学海外派遣研究員（長期）としてスウェーデン・カロリ nska研究所に1年間の留学をしている。翌48年に日本大学助教授、昭和52年4月に日本大学教授を兼任した。同年4月27日、赤坂東宮御所において、当時皇太子殿下であった今上天皇に、海洋水産資源開発センター阿部宗明博士・東宮侍従富士亮博士同席の下、魚類の歯の形態・組織についてご進講を行つてゐる。平成元

（1989）年には山東医科大学（現山東大学医学部）客員教授に推挙され、平成11年2月に日本大学歯学部長、翌12年に日本大学副総長に就任した。平成16年9月に学部長職及び教授職を辞した戸田は、平成19年9月まで歯学部総合歯学研究所教授として勤務した後、平成19年10月に日本大学名誉教授となつてゐる。平成20年6月から平成22年5月まで日本大学常任監事を務めた。平成28年11月には叙勲（瑞宝中綬章）の栄に浴した。

解剖学第II講座を現在主宰している磯川桂太郎は、本学部卒業後の昭和59（1984）年4月に助手となり、東京大学医学部解剖学教室第3講座に内地留学し、山内昭雄教授の下で教育・研究に従事し、帰学後、弾性系線維の電顕組織化学的研究で学位を授与された。その後、本学講師（専任扱）となり、平成元（1989）年9月に米国ウイスconsin医科大学のMarkwald博士の下に2年7カ月留学した。帰学後、高城稔の第I講座への移籍

（平成5年5月教授昇任）に伴い、平成7年4月に電子顕微鏡応用研究部門主任を命ぜられ、平成15年に専任講師となり、平成11年から米国解剖学会の学術誌『Anatomical Record』のアジア地区Editor（1999-2009）を務めた（図2）。平成17年4月に教授を兼任し、戸田の後任として第II講座の主任教授となつた。

本学部基礎系講座の専任教員数は、平成27（2015）年3月に定員5名からマイナス1名を上



図1 学部長時代の戸田善久先生

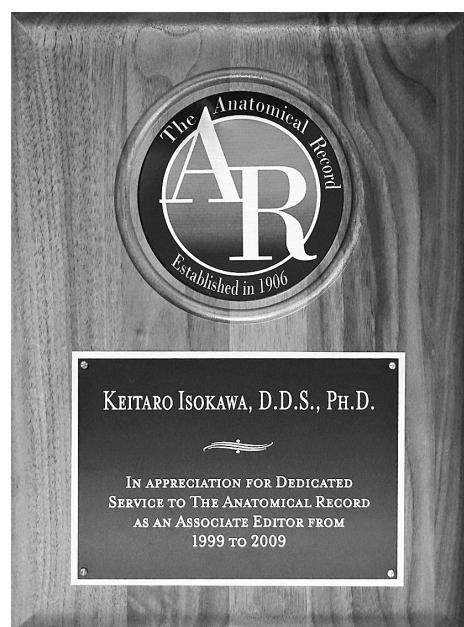


図2 AR誌アジア地区 Editor 功労の盾

限とするという申合せがなされ、現在、磯川は、自らを含めた専任教員4名で教育、研究を担うとともに、本学部の教学関係業務の運営にも尽力している。本学部において、講座名は現在、教員定数に関する内規の「別表」の表記に従うことになっている。この表記は、平成初期に講座名と設置年度を併記し文部省（当時）へ届け出た「大学（学部）概況」という書類を根拠にしており、当講座名の表記は解剖学第Ⅱ講座である（「教室」の語はなくローマ数字のⅡを使用）。しかし、本稿の文中では、各時代で実際に使われていた名称に意味があるとして、解剖学教室あるいは解剖学教室第2講座などの記載も用いている。

### 教育について

現在、第Ⅱ講座の教員が担当している主な教科は、組織学、組織実習、発生学、発生学実習、歯の解剖学実習、口腔組織学、口腔組織実習である。これらは、本学部開設時の開講科目のうち、系統解剖学（現在は第Ⅰ講座担当）以外の科目に相当する。第Ⅰ、第Ⅱ講座でのこうした分担は、昭和46（1971）年7月に両講座の分離独立が成立してから続いている。全国的にも解剖学・組織学は、他の学問領域に比べて圧倒的に担当授業が多いため2講座以上が充てられている。2講座制では肉眼（マクロ）解剖学と顕微（ミクロ）解剖学で教育分担をしていることが多く、3講座制では神経解剖の担当講座を別に設けていることが多い。本学部もおおむねはマクロ、ミクロでの教育分担である。

本学部の歯の解剖学の授業は、昭和54（1979）年から平成2（1990）年まで、松戸歯学部教授であった平井五郎が兼担講師として担当した。その後、当講座の柿澤佳子が担当し、平成13年には講義と実習の要素を合わせ持つ教科となった。平成15年からは本学部法医学講座の網干博文にこの教科の担当責任者を委嘱してきたが、平成29年からは再び当講座の山崎洋介が教科担当責任者を務めることになった。なお、網干は、平成3年から平成5年まで豪州アデレード大学で人類学的な観点から歯や歯列形態の研究に従事した教員である。組織学及び発生学では、歯や口腔にとどまらない教育を行うため、当講座の専任教員は医系の解剖学教室に国内留学し研鑽を積むことが慣例となっ

ている。

当講座では伝統的に、実習教育には格段の重きが置かれてきた。『組織学実習』と題した本学部の実習書（昭和33（1958）年刊）では、扉に *Leitfaden Für Histologischen Kursus* と記され、続く目次ページでは、歯肉などと旧字体漢字が使われ、口唇は *Mundlippe* とも併記されている。解剖学講座の教員による古典語（ラテン語）の授業も平成5（1993）年まで進学課程で必修科目だった。しかし、一方、『歯の組織学実習提要』（昭和31年刊）では、新字体の「歯」が使われており、用語も象牙細管 *dental tubules* などと和英併記になっている。歴代の教授や講座スタッフは今日に至るまで、こうした実習書の執筆や改訂を積み重ねてきた。

教科書や図譜（アトラス）もまた然りである。昭和43（1968）年に教授就任の磯川宗七は、欧米の原書を教科書とする時代でもあったため学生向けのオリジナル資料の充実と提供に大いに尽力し、また一方で『人体口腔組織図譜』（医歯薬出版）の改訂も丹念に重ねていた。同書は白黒写真による光頭像を主体とし時代性を感じさせる書である。昭和52年に教授就任の戸田は、『口腔の発生と組織』（南山堂）の改訂を重ねたが、Ten Cate の『Oral Histology』の訳出にも数版にわたって参画した。Ten Cate は初版刊行後間もない昭和56年に来日し、戸田の招きで客員教授として本学部に滞在して講演や学生向け講義を行った。平成17（2005）年に教授就任の磯川桂太郎は学部2年生の時にその講義を聴講している。磯川は、本学部補綴学教授の松村英雄らと『歯のかたち』（永末書店）を出版した。また、昭和大学歯学部教授の佐々木崇寿が初版を著した『組織学・口腔組織学』（わかば社）に第2版から参画し、佐々木の逝去後も改訂を重ねて第4版では共著者らと共に発生学分野を追補し充実を図った。鶴見大学歯学部教授の川崎堅三らが著した『カラーアトラス口腔組織発生学』（わかば社）でも第3版以降、著者かつ編者として改訂に参画している。近刊の第4版は、全国の歯科大学・大学歯学部中18校の組織学担当者が参画するに至り、学習内容や用語、組織像についてのデファクトスタンダードを歯学生に提示する書となった。

国や大学が示す教育改革の方向性は教員の意向

や努力、教育現場の状況に大きな影響を与えてきた。本学部での新カリキュラム導入の波は、当講座へは平成6（1994）年から翌7年と平成13年に到達した。進学・専門課程の別を廃する6年一貫という方針で、ミクロ解剖の授業対象は、学部1年（現3年生）から現2年生（かつての進学課程2年生）へ2段階で変更になった。つまり、移行の直前直後2つの学年に授業を同時併行で行う難局を2度乗り越えたわけである。授業時間も従来の90分から50分に変更された（図3）。複数講座の教員が協力して単一教科を受け持つことも奨励され、当講座でも、歯科矯正学、小児歯科学、歯科放射線学等の講座と連携した。本学部口腔外科学講座の清水治は、当講座での博士論文研究後に、米国ボストン MGH ハーバード皮膚科学研究所の Goetinck 博士の下に留学し、帰国後、口腔組織学授業の一部を現在も担当している。

現在の解剖学第Ⅱ講座の教員は、伝統を重んじると同時に進取の気性にも富んでいる。先に言及

| 第三学年   |             |             |             | 第四学年          |               |               |               |
|--------|-------------|-------------|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 曜<br>時 | 日           | 火           | 水           | 木             | 金             | 土             | 曜<br>時        |
| 8.30   | 解剖学<br>(尾崎) | 解剖学<br>(鷲井) | 解剖学<br>(三井) | 口腔組織学<br>(鷲井) | 有床補綴學<br>(中野) | 火病理学<br>(馬場)  | AB病理学<br>(櫻井) |
| 9.15   |             |             |             |               |               | 衛生学<br>(馬場)   | 衛生学<br>(櫻井)   |
| 9.25   |             |             |             |               |               |               |               |
| 10.10  |             |             |             |               |               |               |               |
| 10.20  | 生理学<br>(尾崎) | 生理学<br>(鷲井) | 生理学<br>(三井) | 解剖学<br>(尾崎)   | 解剖学<br>(鷲井)   | 外科学<br>(馬場)   | 外科学<br>(中川)   |
| 11.05  |             |             |             |               |               |               |               |
| 11.15  |             |             |             |               |               |               |               |
| 12.00  |             |             |             |               |               |               |               |
| 1.00   | 解剖学<br>(加藤) | 解剖学<br>(加藤) | 解剖学<br>(三井) | AB生理学<br>(尾崎) | AB生理学<br>(鷲井) | AB生理学<br>(尾崎) | AB生理学<br>(中川) |
| 1.45   |             |             |             |               |               |               |               |
| 1.55   |             |             |             |               |               |               |               |
| 2.40   |             |             |             |               |               |               |               |
| 2.50   | 生化<br>(押邊)  | 生化<br>(大矢)  | 生化<br>(大矢)  | 解剖学<br>(鷲井)   | 解剖学<br>(鷲井)   | 解剖学<br>(櫻井)   | 解剖学<br>(小早川)  |
| 3.35   |             |             |             |               |               |               |               |
| 3.45   |             |             |             |               |               |               |               |
| 4.30   |             |             |             |               |               |               |               |

図3 昭和35（1960）年の本学部第3、4学年の前期時間割

この時代は100分授業である。本文中で言及の新カリキュラム導入前年の平成5（1993）年は90分、導入年以降は50分となつた。

した組織学実習提要を起源とする冊子体実習書の約20年に及ぶ改訂歴は、iOMaCにも記録されている。iOMaCとは、典型的な組織像を学生に提供するiPadアプリである。学習教材としての組織像を学生の手元に届けたいという組織学担当教員の長年の思いの結実である。平成13年以降、CD-ROMやホームページで供覧するシステムを構築し、これが私立大学情報教育協会賞を受賞した。講座の山崎がこれをさらに発展させiOMaCとした。これによって本学部の学生は各自が組織像を「携帯する」ようになった。また、顕微鏡と標本を用いる伝統的な実習に併行して、バーチャル標本を活用した実習も始まっている。バーチャル標本は、視野や拡大倍率が固定された画像ではなく、実際の組織標本をまるごとデジタル化している。任意の倍率で標本の任意部位を、iPadで観て学ぶことができる。さらに、歯の解剖学の学習では、歯の3次元像を回転させたり、メガネをかけて立体視することで歯型彫刻を進めたり、歯のCT断層像や3次元再構成像を操作しながらの実習も行われている。地図を持たずして身体構造の世界を旅することはできない。いわんやその機能の理解をやである。本学部教育課程において、解剖学第Ⅱ講座が担う教育上の目的と責務は極めて明確だといえる。

学生数の多い私学歯学部の実習教育では、インストラクターとしての教員の確保は重要であり、平成28（2016）年度現在、当講座では、石崎隆弘、大津博司、金沢紘史、岸重人、久保田桜、齋藤登、篠塚恵造、白土昌之、鈴木里恵、高木英男、難波祐一、菱川秀樹、本淨敏、松井弘行、宮本晃宏、森川保、山本晃司、山本達也、横山弘一、若尾孝一、済陽万紀子に兼任講師が委嘱されている。なお、白土は、組織学講義の一部についても平成14年以降長きにわたって担当している。

## 研究について

大学院歯学研究科が開設されたのは、解剖学教室の開設（昭和22（1947）年）から9年が経過した昭和31年である。解剖学教室とその後の解剖学教室第2講座で研究指導を担ってきた教授は、加藤信一、三井但夫、尾崎公、磯川宗七、戸田善久及び現職の磯川桂太郎である。

加藤は主に肉眼解剖学の分野で、曲線形態の解

析的研究や、形態と機能との相関に関する推計学的研究を行った。三井は組織化学的研究を行い、本学部在任中は血球中のペルオキシターゼ反応に関する研究を行った。尾崎は藤田恒太郎教授の下に内地留学して以来、歯の形態学的研究に専念し、昭和43年豪州アデレード大学に日本大学長期派遣研究員として2年間留学し、口腔領域の比較人類学的研究を行い、昭和46年に松戸歯科大学に移籍した。この間の講座論文の概要は、昭和43年2月に刊行された『教室開設20年の記録』（日本大学歯学部解剖学教室）でも知ることができる。

第2講座としての初代教授となった磯川宗七は、主に組織学的な研究を行った。磯川は学生時代から魚の歯に興味を抱き、講師、助教授時代はもちろん、教室を主宰してからも魚類の歯に関する光顕・電顕的研究を続けた。この伝統はその後も形を変えながら現在も第Ⅱ講座では堅持されている。磯川は藤田恒太郎教授の下で、歯の組織学に関する研究に従事し、犬の歯のリンパ系に関する研究を行って学位を授与され、帰学後、主に歯に関する組織学的研究を行った。米国インディアナ大学から帰国後は、Historadiographyによる歯の組織学的研究をはじめ、多くの業績を挙げた後、走査型電子顕微鏡を用いた研究に取り組み、さらに透過型電子顕微鏡による歯の組織学的研究を押し進めていた矢先、昭和50年1月13日病没した。このことは、めざましい発展を遂げつつあった第2講座にとって極めて大きな痛手であった。この間の論文業績の概要は、昭和54年1月に刊行された『磯川宗七教授業績集』（日本大学歯学部第二解剖学教室）で知ることができる。

その後2年間の教授不在期間を経て、昭和52（1977）年4月、第2講座の助教授であった戸田善久が教授を兼任し教室を主宰した。戸田は磯川宗七が残した研究課題とスタッフを引き継ぎ、魚類の歯の組織と発生に関する光顕・電顕的研究、走査電顕を用いた硬組織の研究を行った。その後、これらに加えて、大阪大学歯学部・浜田茂幸らとの共同で、歯面への細菌の付着及び齲歯原因菌による多糖の形態的研究並びに口腔細菌の付着に関する免疫電顕的研究などを展開した。また、稻毛稔彦助教授らによる歯の形成と成長因子に関する免疫組織学的研究や、高城稔助教授らによる石灰化や軟骨基質プロテオグリカンの組織化学的

研究、弾性線維やオキシタラン線維の免疫電顕的研究も活発に行われた。高城の第1講座への移籍と相前後して、柿澤佳子による魚類の歯の発生学的研究、磯川桂太郎らによる上皮間葉トランスフォーメーションや軟骨のパターン形成に関する研究なども展開された。戸田在任中の講座の研究業績の概要は、平成17（2005）年3月刊行の退任記念誌『解剖学教室とともに40年』（日本大学歯学部解剖学教室第2講座）で知ることができる。なお、磯川宗七、戸田善久両教授在任中の学術論文のファイリングとデジタル化は講座としての取り組みがなされている。

現在、解剖学第Ⅱ講座を主宰している磯川桂太郎は、内地留学先の東京大学医学部解剖学教室において比較解剖・系統進化に視点を置く研究文化に強く影響を受け、また、帰学後は高城が考案した電顕組織化学的手法を活用し、魚類大動脈弾性系線維の研究の成果によって学位を授与された。国外留学では、系統進化と表裏をなす発生に注目して上皮間葉相互作用やパターン形成の研究を行い、帰国後は当講座に培養系や胚操作などの手法を移入し、組織形態と細胞外線維系との機能連関の研究を展開している。現在、その一部は、弘前大学教授敦賀英知（平成25年度まで福岡歯科大学）らとの共同研究としても進められている。磯川がこれまで研究指導を担ったのは、第Ⅱ講座の教員・大学院生では、本間淳一、姜宜、村上慶太、田中瑞穂、山本達也、山崎洋介、難波祐一、鈴木里恵、鳥海拓、久保田桜であり、研究員・研究講座員では、鈴木篤、松井弘行、高橋秀行、青木秀啓、横山弘一、濱いつ子、菅山妙子、遠藤精一、小宮山利幸、森川保、大津博司、深井眞樹、沼田謙一郎、久保田祥二、篠塚恵造である。また、臨床系講座の教員・大学院生では、藤波一典、秀真理子、下山祐子、平野恵一、白井理生、岩上恵子、山本晃司の博士論文指導を行っている。

平成17（2005）年4月の磯川の教授兼任後、篠塚恵造、宇佐美伸治、湯口眞紀が講座スタッフに加わり、後二者は現在も研究活動に携わっている。平成15年助手採用の山崎洋介は、平成20年に博士の学位を取得、助教に昇格し、平成22年4月から新潟大学医学部解剖学第三講座（牛木辰男教授）に2年間の内地留学をした。平成26年9月から日本大学海外派遣研究員としてチェコ共和国プ



図4 平成26年 解剖学第Ⅱ講座  
篠塚, 山本, 鳥海, 鈴木, 志賀  
白土, 本田, 磯川, 山崎, 湯口

ラハのカレル大学 Robert Cerny 博士の下で顔面の進化・発生学的研究に従事していたが、平成28年9月に帰国し、現在当講座での研究を再開している。平成20年に専任講師として採用された本田雅規は、前任地の東京大学医科学研究所に至るまでに培った経験を基に再生医学の基礎研究を展開し、本学部臨床系の大学院生の研究指導に貢献した。本田は平成22年に准教授に昇任、平成27年4月に母校の愛知学院大学歯学部の口腔解剖学講座に教授として赴任した。平成20年6月に入室した岡暁子博士は、口蓋の発生や弾性系線維に注目した研究を行い、翌21年6月に福岡歯科大学に転出した。平成21年に大学院生として入室した鳥海拓は、平成23年4月に日本大学助手に任せられ、教育補助と再生医学の基礎研究に従事し、平成27年に大学院博士課程を修了し同年4月には助教に昇

格、現在も研究活動に携わっている。なお、平成元年から当講座勤務であった事務職員向井友美（旧姓木村）は平成17年部内異動となった。昭和55（1980）年から勤務していた永井英男は、電顕技術をもって講座内はもとより部内の研究支援に大いに貢献したが平成27年7月に定年退職した。

#### 現在の人事

平成28（2016）年度の解剖学第Ⅱ講座の構成は、教授 磯川桂太郎、助教 山崎洋介、鳥海拓、助手湯口真紀、大学院生 金澤紘史、臨時職員 志賀礼子である（図4）。人事に関してより詳しくは、本稿で触れた当講座関連史料及び解剖学第Ⅱ講座「教室史」（『日大歯学』、90、61–86、2016）を参照のこと。

# 日本大学歯学部百年史

---

平成29年8月31日発行

編集歯学部百年史編纂委員会

発行日本大学歯学部  
東京都千代田区神田駿河台1-8-13  
電話 03-3219-8001

印刷 一世印刷株式会社

---

題字 日置 和江（元歯学部職員）